

コミュニケーションを支援する ICT の利活用

～音声ペン、iPad の活用とプログラミング教育の実践を通して～

企画者	是枝 喜代治	(東洋大学ライフデザイン学部)
	石飛 了一	(筑波大学附属大塚特別支援学校)
	生田 茂	(大妻女子大学人間生活文化研究所)
司会者	根本 文雄	(筑波大学附属大塚特別支援学校)
	是枝 喜代治	(東洋大学ライフデザイン学部)
話題提供者	原田 薫	(東京学芸大学附属特別支援学校)
	富山 仁子・菊池 萌子	(栃木県立那須特別支援学校)
	山下 さつき・松島 宏樹	(都立府中けやきの森学園)
指定討論者	石飛 了一	(筑波大学附属大塚特別支援学校)
	菅野 和恵	(東海大学健康学部)

KEY WORDS: ICT の利活用, 手作り教材, コミュニケーション支援

【企画趣旨】

近年、GIGA スクール構想の実現に向けた ICT 教育の推進やプログラミング教育の充実が謳われている。本企画では、これまで特別支援学校等の学校現場における手作り教材の制作と教育実践の諸事例を通して、多様な障害のある児童生徒のコミュニケーション支援の在り方について議論を続けてきた。本企画では、各校の最新の実践に学びながら、意思の伝達に課題のある児童生徒一人ひとりの抱える困り感を軽減するための ICT の活用法や、特別支援学校におけるプログラミング教育の在り方について議論を深めていきたい。

【話題提供者の趣旨】

1) iPad アプリを活用した手紙指導の実践

(東京学芸大学附属特別支援学校 原田 薫)

高等部1年生徒Aは、身近な教師や友達に自分の話や思いを伝えたいという気持ちが育ってきているが、読み書きは正確さに欠け、強い苦手意識を持つ様子が見られる。このような生徒に対し、しゃべり言葉や入力した文字を画像などと共に相手に伝わりやすいイメージとして自由に表現できる iPad アプリ「しゃべり描き BIZ」を活用して卒業生へ感謝の手紙を書く取り組みを行った。生徒自身が理想とする読みやすいひらがな、漢字で記された手紙を読み直し、伝わりやすさや読みやすさを確かめる姿が見られた。また、ドラッグやイラスト挿入などの新たな操作を覚え、思い通りの手紙を仕上げることができた。伝えたい気持ちが育ってきた生徒が伝える手段を増やし、達成感や自信につなげる機会となったと考えられる。

2) 音声ペンの様々な活用

(栃木県立那須特別支援学校 富山 仁子・菊池 萌子)

栃木県立那須特別支援学校では令和2年度から音声ペンを活用している。学校全体の取り組みではないが、興味をもった先生方とともに実践してきた。今回の発表では、小学部の重複障害学級の児童に対し、朝の会や帰りの会での司会進行を一人でできるようにと、GM オーサリングツールを使ってイラスト全体へドットコードをかぶせて工夫した事例、小学部通常学級での国語算数の時間に文字学習として取り組んだ事例、そして中学部において廊下の掲示板において文字の読めない生徒にも興味をもってもらうと音声ペンによるメッセージを工夫した事例を発表する。工夫次第でどこでも誰にでも音声ペンを活用できるということを紹介できればと思う。

3) 特別支援学校におけるプログラミング教育の実践

(都立府中けやきの森学園 山下さつき・松島 宏樹)

東京都立府中けやきの森学園では、令和元年度から外部専門家を活用して、プログラミング教育を推進している。本校では、2部門(肢体不自由・知的障害)3学部(小・中・高)で、どのような実践が児童・生徒の発達段階に適しているかを検討してきた。令和3年度には、集めた実践事例からプログラミング教育の系統表を作成した。令和4年度には、年間計画の段階で、各担任が系統表をもとに検討し、児童・生徒の実態に合わせてプログラミング教育を取り入れるようにした。これまでの実践をとおして、児童・生徒が粘り強く試行錯誤し学習上の課題に取り組む姿がみられるようになった。このことから、児童・生徒の自己効力感の高まりにも寄与したと考えられる。今後は、高まった自己効力感を効果的に生かした、主体的な学び等を実現するための取り組みが重要となる。

【指定討論者の趣旨】

(筑波大学附属大塚特別支援学校 石飛 了一)

従前より特別支援教育では個のニーズに応じた配慮・支援をしつつ、集団での学びを大切にしてきた。そして今、新学習指導要領においては個別最適学びと協働的な学びを一体的に充実させることが求められている。ICT 機器の利活用が一人一人が抱える困り感を解消しながら、集団での学びにどのように貢献するのか、個の学びと集団の学びをどのように繋げるのか、事例をもとに考えたい。

(東海大学健康学部 菅野 和恵)

GIGA スクール構想における一人一台端末については、教員が授業で活用する「教具」としての使い方と、子どもたちが日常的に学びにおいて活用する「文具」としての使い方がある。特別支援学校において端末や音声ペンは、教具・文具であり、コミュニケーションの道具である。知的障がいをもつ児童生徒が主体的に学習できるよう、ICT が学びを励ます道具としてどのように使われているのかを考えたい。

付記

本報告は、各自治体の個人情報保護条例に鑑み、本人あるいは保護者及び所属機関等の許可を得て掲載しています。

(KOREEDA Kiyoji, ISHITOBI Ryoichi, IKUTA Shigeru, NEMOTO Fumio, HARADA Kaoru, TOMIYAMA Jinko, KIKUCHI Moeko, YAMASHITA Satsuki, MATSUSIHIMA Hiroki, KANNO Kazue)